春岡村の伝説

◆◇◆　キツネの伝説と岩槻との関係　◇◆◇

深作や丸ヶ崎では、昭和３０年くらいまで、日用品は大宮でなく岩槻に行って購入していました。買い物に行くのは一家の大黒柱。お嫁さんは舅に買ってきてほしいものを頼まなければなりません。生理用品なども頼まなければならないので困ったということです。

簑輪村に通じる坂道

綾瀬川にかかる風間橋を渡って右に曲がり、田んぼやソバ畑を抜け、新溜稲荷の下を回り込み、京料理ほそいがある急な坂道をのぼれば簑輪村です。

新溜稲荷の森一帯は「まつやま」と呼ばれ、若い人でもその道を通るのがおっくうなほどマツやカシの木がうっそうと茂っていました。簑輪村に入ると、だんごやおでんを商う家があって、旦那さんは、買い物ついでに岩槻で遊んだり一杯飲んだりするのが楽しみでした。

そんなことから、岩槻の新溜稲荷から七里の踏切りに通じる道で、いい気分の旦那さんがキツネに化かされたのでしょう。

● 岩槻に伝わるお話し

深作の人が気分よくお酒を飲んでの帰り道。新溜稲荷の森を通り過ぎ、ソバ畑の中を歩いても歩いても深作村の入口につきません。揺れているソバの白い花に酔ったかな、と思い夜目をすかして見ると、まだお稲荷さんの所です。そして再び家をめざして歩き出したのですが、行けども行けども田んぼの道から抜けられません。とうとうあたりが白みはじめてようやく家にたどり着きました。それからというもの「新溜稲荷にまやかされた」といううわさが広まったということです。（『おじいさんおばあさんに聞く岩槻２』より）

風間橋と綾瀬川

ソバは五穀に含まれないので年貢として取り立てられませんでした。また、やせ地でも育ち、種をまいてから６０～７０日で収穫できることから、農家は自家用の食料として育てていたようです。

（東三番街　平山由喜）